

2010年5月16日

NEC、がん診断に参入、

患部の組織をデジタル画像化 高精度に判定

NEC はがん診断事業に参入する。患部をデジタル画像化し、がんにかかっているかどうかを高精度に判定できるシステムを開発、医療検査会社を通じて提供し始めた。IT（情報技術）を活用し、高齢化で市場拡大が確実視される医療分野を新たな収益源に育てる。

医療検査最大手のエスアールエル（SRL）と組み、新システムを使ったサービスを始めた。SRL が病院から検査業務を受託。病院が採取した患部の組織をデジタル画像にし、過去のがん患者のサンプルデータと自動で照合する。画像処理技術を使ってがん細胞の密集具合や形を分析し、がんかどうかを判定する。

NEC と SRL はまず胃がんを対象に判定を開始。約 2 万人の胃がん患者の組織を解析したデータを蓄積し、判定制度を 99%に高めたという。NEC は大腸がんや乳がんなどにも判定対象に加える。医療検査会社との提携も拡大し、今後 3 年で提携先を 10 社に増やす。

従来のがん診断は医師が患部の組織を顕微鏡で見えて判定する。がん組織は形や大きさが患者によって違い、医師の経験で判定にばらつきがあるという。がん検査などの件数は年間 1000 万件あるのに対し、診断医は 2000 人弱といわれており、人手も不足している。

NEC は医療向けでは電子カルテや医療事務処理のシステムを提供しているが、治療に直接役立つシステムは手掛けていなかった。

以上

=日経新聞=